2017年6月18日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　　　**「申命記：主の律法」**

聖書箇所：申命記　17:14－20

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日の聖書箇所は申命記です。申命記というのはモーセが死の前にイスラエルの民に対し守るべき掟と定めを告げた文書です。ヘブル語ではdebarihmと言います。これはdahbarという「話す」という動詞の名詞形複数です。従って、「言葉」という意味です。もちろん「主なる神の言葉」です。預言者モーセが主なる神の命令を民に伝えているのです。従って申命記の中には「～をしてはならない」とか「～をしなければならない」という表現が多数出てまいります。また英語ではDeuteronomyと言います。これはラテン語のDeuteronomiumから来た言葉ですがnomos即ち法のdue第二、即ち写しと言う意味です。これはユダ王国16代王ヨシアの時代に律法の原本が発見され申命記はその写しである、という言い伝えに基づいてつけられた名前です。「律法の写し」ということです。申命記は律法の中心的文書です。これを具体的場面において解釈したのがミシュナーであり、この全体でユダヤ教の「律法」となります。ちなみに、私の三番目の息子は申命記の「申」（シン、のべる）の一字で「のぼる」と読ませて名前としました。学校では通常シン君だったようです。子供からみると少々迷惑な名前を付けてしまったかもしれません。

　申命記の基本的考え方は、この主なる神の掟と定めを忠実に守れば神の恵みが受けられこの世でも祝福された命を全うすることができるが、これを破ると、神の恵みの受けられない滅びの道を歩むことが決定づけられる、というものです。死んでからは神の恵みが一切受けることのできない、黄泉の国に行くことが運命づけられます。その先の希望は全くありません。この考え方は申命記的神学と称せられ、ユダヤ教の正統的神学となります。行為結果連関という言い方もします。ある一定の行為の結果が祝福であったり滅びであったりする、のです。仏教的な言葉で言えば因果応報です。主なる神より与えられた法を順守することによって救いが与えられる、という考え方です。ユダヤ教とイスラム教は基本的にこの考え方です。キリスト教は主イエス・キリストへの信仰により救いが与えられる、と言う考え方であり、この律法主義と対立します。しかし、イエス様の言動をみますと律法をむやみに否定しているのではなく、恵みの手段としての律法の基本に立ち返るべきだということをおっしゃっているようです。今日は、この律法の書に書かれている事柄の内、イスラエルの信仰にとって決定的に重要な箇所と我々には理解しにくい箇所に限定して、お話ししたい、と思います。

申命記には出エジプトを回顧した「モーセ第一の説教」、律法の具体的内容を語った「モーセ第二の説教」、神に背くイスラエルに対し主なる神に立ち帰ることを説いた「モーセ第三の説教」があります。本日の聖書箇所はこの第二の説教の内、「社会生活についての諸規定」とされる箇所の最初です。王たる者の守るべきことについて述べられた箇所です。しかし、今日は申命記を概観する、と言う見地から、その箇所にはこだわらず、お話しさせていただきます。

　申命記といえばやはりあのシェマーです。6:4-5をお読みします。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」とあります。これは新改訳ですが、口語訳でお読みします。「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」となっています。シェマーというのはこの「聞け」という言葉です。「sha:ma:」という「聞く」という動詞の命令形です。このシェマーはユダヤ人の信仰苦白の中心であり、正統派ユダヤ教徒はこれを書いたものをいつも身に着けています。イスラム教徒の「アッラーは偉大なり」と似ています。これの中心は「主は唯一の主である」、です。直訳しますと「ヤハウェ、一（いち）」です。所謂唯一神の告白です。真の神はヤハウェだけである、と言う意味です。ギリシャのように神が多数いてその中に一人最高神が居る、というのではなく、真の神はヤハウェしか存在せず、他の神と称せられるものは主なる神による被造物である、ということになります。その唯一神ヤハウェが我らの神である、と言っています。これはモーセがイスラエルの民に語った言葉ですから、我らの神とはイスラエルの神、ということです。イスラエルの神ヤハウェが唯一の神である、ということになります。これは、エジプトの地で奴隷であった小さき民イスラエルが自らの神を唯一の神だ、と言っているのですから、大変なことです。他の大国例えばエジプトからすれば、“なにをぬかすか。この前まで奴隷の民であった輩が自分たちの神が唯一の真実の神だ、などとふざけたことをほざいている”ということでしょう。もっともエジプトの文書ではイスラエルが出て行った、ことなど注目もしていませんが。

　このシェマーのもうひとつのメッセージは「主を愛しなさい」です。イスラエルの民に対し、主なる神、ヤハウェを愛しなさい、と言っています。神が選ばれた民イスラエルを愛する、というのは解ります。またこの神がこの世を創造されそしてそれを愛しているというのも解ります。しかし、逆に我々が主なる神を愛する、とはどのようなことなのでしょうか。どうも「主われを愛す」と「われ主を愛す」というのは同じことではなさそうです。申命記のなかで人が主を愛する、という箇所が意味している箇所を見てみますと、主なる神への信仰を指しているようです。信仰は信頼ですから、主なる神を信頼する、ということです。それは主なる神に依存する、ということでもあります。100%信頼してお任せする、という事です。モーセ以降、イスラエルはカナンの地に入るに付き、戦争が避けられなくなりますが、主なる神に委ねている時に勝利し、そうでなければ敗北する、という話しが展開されます。主なる神の戦い、「聖戦」とはこのことです。人間の力を頼りにした戦争は「聖戦」ではありません。神を愛する民の戦争は神のみに頼る戦争なのです。神の力に依存した戦争が聖なる戦い、「聖戦」なのです。イエス様は武力に頼ることを全面否定していますから、イエス・キリスト以降は聖なる戦争、主なる神の戦争は認められなくなった、と理解すべきです。正しい戦争と書いて正戦論というのがありますが、イエス様の言動からはいかにしても正当化しえないことです。この主イエス・キリストを100%信頼し、委ねるのがキリスト教の信仰であり、主を愛することになります。信仰が深まるとか強まる、と言いますがそれはこの復活の主イエスへの信頼の深まり、のことだと思います。シェマーは私たちキリスト者にとっては主なるイエス・キリストを愛すること即ち、主に100%信頼し、委ねることを命じているのです。簡単なようで、これがなかなかですね。

　次は「聖絶」の問題があります。7:2をお読みします。「あなたの神、主は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない」とあります。この「聖絶」という言葉は「he:rem」という言葉ですが、これは「ha:ram」という動詞の名詞形です。意味は燔祭として捧げる、というのが元の意味です。燔祭は焼き尽くす、ことですから、焼き尽くし絶滅させる、という意味にもなります。命を完全に断つ、ということです。この箇所は口語訳では「全く滅ぼさなければならない」と訳されています。この「聖絶」で示されていることが歴史的事実としてはどうであったのか、これを命令する神は何を意図されているのか、聖書を神の言葉として受け止める我々にとってはいかなる意味をもつのか、は難しい問題です。旧約聖書の最大の問題と言っても良いでしょう。武力を完全否定しているイエス・キリストを主と仰ぐ我々キリスト者にとっては、「聖絶」が人間を含む他の生き物の命を滅ぼし尽くす、ことではありえません。新約の民、我々にとっては信仰の戦い、における、悪霊を滅亡に追いやること、を意味している、と理解するのが一般的です。サタンとの信仰的戦いです。悪の枢軸に対する戦い、と称して、先制攻撃的戦争を正当化したアメリカの大統領がおりましたが、キリスト教徒の名に恥じる行いです。むしろ、武力行使という、自らに憑（と）りついている、悪霊の誘惑と戦うべきです。サタンはどこか他のところに居るのではなく、自らの中に居て笑っているのだと知るべきです。ではこの「聖絶」によって神様は私たちをどのようにしたい、のでしょうか。「聖なる民」にしたい、と願っておられます。7:6-7をお読みします。「あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もっとも数の少ないものであった」とあります。私たちを選んで、主の聖なる民、宝の民とされた、と言っています。

これと関連して、「聖別」と言う言葉があります。聖なるものとして分ける、ことです。私たちを宝の民として「聖別」した、と言っています。その民が他から影響を受けて、聖なるものとしての特徴を失うことがないよう、悪霊の「聖絶」が必要なのです。“主が私たちを恋い慕う”という言葉が使われています。信じられない言葉の使い方です。しかも、我々を選んだのは数が多いからとか強いとかいうのではなく、「最も数が少なかった」からだと言われています。大いなる民であれば、自らの力に頼り、それによって戦おう、とするからでしょう。主により頼む民はその力のない民なのです。現代の世界においてはクリスチャンと分類される人口は多数です。しかし、この世での行動を律しているのは、どちらが儲かるか、とかどの国についていた方が得か、とか結局損得勘定で行く道を決めているのが現実です。その意味では心から主に委ね、歩んでいる人は少ないのです。私たちもそうです。主イエスへの信仰に立ち行動している時はほんの少しの時間だけです。自分を含め、選びは「最も数の少ない」民にのみ働くと言わざるをえません。

　具体的な律法を若干見てみましょう。12章から26章までが律法の本体部分です。まず、12:23-25をお読みします。「ただ、血は絶対に食べてはならない。血はいのちだからである。肉とともにいのちを食べてはならない。/血を食べてはならない。それを水のように地面に注ぎ出さなければならない。/血を食べてはならない。あなたも、後の子孫もしあわせになるためである。あなたは主が正しいと見られることを行わなければならない」とあります。この箇所から、エホバの証人は輸血禁止、のメッセージを引き出しています。どのように解釈してそうなるのか解りませんが、ここでは血はいのちの象徴であるので、人間には食することの許されている肉と一緒に食べるようなことは禁止される、ということを言っています。聖なるものとそうでないものは別にしなければならないのです。「聖別」のことを言っています。この箇所をもって人の命を長らえらせるために他の人の血と一つにされることを主なる神が禁止されているとは考えられません。命の象徴である血を聖なるものとして扱え、ということです。もちろん、聖なるものですから、特別なものとして扱う必要があります。

　14章には食物規定があります。14:3-11をお読みします。「あなたは忌みきらうべきものを、いっさい食べてはならない。/あなたがたが食べることのできる獣は、牛、羊、やぎ、/鹿、かもしか、のろじか、野やぎ、くじか、おおじか、野羊。/および、ひづめが分かれ、完全に二つに割れているもので、反芻するものは、すべて食べることができる。/反芻するもの、または、ひづめの分かれたもののうち、らくだ、野うさぎ、岩だぬきは、食べてはならない。これらは反芻するが、ひづめが分かれていない。それは、あなたがたには汚れたものである。/豚もそうである。ひづめは分かれているが、反芻しないから、あなたがたには汚れたものである。その肉を食べてはならない。またその死体にも触れてはならない。/すべて水の中にいるもののうち、次のものをあなたがたは食べることができる。すべて、ひれとうろこのあるものは食べることができる。/ひれとうろこのないものは何も食べてはならない。それは、あなたがたには汚れたものである。/すべて、きよい鳥は食べることができる」とあります。この食物規定について、これは人間の健康を考えての戒めであるとか、当時のカナンの慣習にて忌み嫌われるものとされていたからだ、とかの説明があります。しかし、あるユダヤ教のラビが「神が禁止した。だからこれは守らなければならない。一切の説明は不要である」と言っているのを読んだことがありますが、そのように理解するしかないと思います。今でもユダヤ人の中に菜食主義のグループがありますし、仏教でも坊さんは菜食主義の派があります。イスラム教では「ハラール」という食物規定があります。新約の民である我々はこのような食物規定から解放されました。しかし、この趣旨は、人間のためになることであれば何でもアリ、ということではなく、人間には許されていることの限界があることを教えている、と理解すべきです。原子力利用について、人工授精についてもそうです。その限界という事があるのです。神の創造された命を大切にして生活しなさいと言われているのであって、それを破壊したり、命を物のように扱うことが許されているはずはありません。タブーとされる限界があるのです。人間が食することが許されている限界点があることを認め、その限界を神の命令として守るべきです。

　15章には所謂安息年のことが書かれています。15:1-4をお読みします。「七年の終わりごとに、負債の免除をしなければならない。/その免除のしかたは次のとおりである。貸し主はみな、その隣人に貸したものを免除する。その隣人やその兄弟から取り立ててはならない。主が免除を布告しておられる。/外国人からは取り立てることができるが、あなたの兄弟が、あなたに借りているものは免除しなければならない。/そうすれば、あなたのうちには貧しい者がなくなるであろう。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えて所有させようとしておられる地で、主は、必ずあなたを祝福される」とあります。「イスラエルの同胞の中では7年経ったら借金棒引きにしなさい」というのです。外国人に対してなら良いが同胞に対しては貸したものは上げちゃいなさい、というのです。根底には同胞の中では助け合うべきで、7年かかっても返せない人には寄付しなさい、ということです。実はこれは全く守られなかった、と言われています。私は以前銀行勤めでしたが、これでは商売なりたちません。しかし、この定めを“そもそも同胞の間で困っている人を助けるのは当たり前で、金銭の貸し借りが発生すること自身がおかしい事だ。もし、貸すという事で商売をしているのであれば、7年経っても返せない人には贈与しなさい”という趣旨である、と理解すれば納得できます。銀行と言う商売は、人間を全部、聖書で言う外国人として扱っている商売である、と言えます。そもそも資本主義社会は貨幣を媒介としたこの世での価値と価値の交換の社会ですから、安息年で想定されている寄付、贈与、喜捨のような無償の交換は想定されていません。これは、寄付、贈与、喜捨により神よりの祝福が得られる、という交換形態であり、資本主義社会の交換形態とは根本で異なる交換形態といえます。我々日々資本主義的交換形態の社会で生活しており、受け入れざるを得ないのですが、「これは本来神様が望んでいることではない」という言葉にも耳を傾けなければなりません。イスラエルの主なる神は貧困者を助けることは我々の義務である、とおっしゃっているのです。こちらが貧困者である場合もありますが、それでも我々は祈りの力を持っており、経済的寄付、贈与、喜捨に代え、熱心な祈りをささげることができます。以前アメリカに居る時、いろいろなところに寄付するクリスチャンのことを聞いたことがあります。１＄の小切手を毎日どこかに送っていた、ということです。人それぞれ表し方に相違があってよいのですが、この人の場合は、これが安息年のこころを現している、事だったのかもしれません。

　そして、本日お読みいただいた箇所です。ここは王の守るべき戒めについて語っている箇所です。17:14を見ますとそもそも王を立てることに聖書は慎重です。これはイスラエルの最初の王サウルが即位する時にも現れています。いったん王になると、そのことにより自分の力を過信し、民を支配される者として扱う誘惑に陥りやすいからです。主なる神により頼むのではなく自己の力によって政治を進めていくことになりがちなのです。このことは社会的に指導的立場にある者すべてに対する戒めです。これを忘れた指導者は歴史のなかにあまたおりますし、今の日本にもおります。16節では「王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない」と主はあなたがたに言われた」とあります。馬をふやす、というのは軍事増強のことです。「エジプトに帰る」とはエジプトを頼りにする、ということです。軍備を増強すること、大国を頼りにすることです。信仰者である王にあるまじきことです。主なる神に100%より頼んでいないのです。

続いて、「多くの妻を持ってはならない。心をそらせてはならない。自分のために金銀を非常に多くふやしてはならない」と言われています。これに反したのが統一イスラエル第3代目の王ソロモンです。このことはソロモンがイスラエルの繁栄していることを見せびらかしていることであり、主なる神に信頼する、というイスラエルの信仰から離れていることを意味しています。20節には「それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることがないため、また命令から、右にも左にもそれることがなく、彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるためである」とありますがソロモンはこれに反しました。「自分の同胞の上に高ぶる」とは同胞に対し支配者として対する、ということです。ソロモンは神殿建設や宮殿建設に、民の労働力を徴発しました。税金も民を苦しめました。自分は小さい者である、と知っている者の態度ではありませんでした。ソロモンの後、王国は分裂の憂き目にあいます。イスラエルの罪理解は、指導者の罪とその裁きはその民すべてに及ぶ、ということです。民には罪がなくても苦難の道に直面させられるのです。日本の過去の戦争に於いても同様です。指導者が謙虚な心を失い、戦争に突入したことによる惨憺たる悲劇は民を襲ったのです。民は逃げるすべがありません。指導者の責任の重大さを示している、と理解するとともに、指導者が神の義に反する道を歩んでいる、と知った時は声を上げる責任がクリスチャンにはある、と思います。

　その他、律法の現在的意義について語っているときりがありません。一つ一つの律法を私たちの今に引き直して考えるように致しましょう。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、本日は申命記からまなびました。主なる神を愛する、ということは全面的に主によりたのむことだと、示されました。また人間には越えてはならない線が在ることも律法の学びの中から示されました。自らの力により頼み、喜んだり、悲しんだりしている愚かな我々ですが、どうぞ主なる神に立ち返り、我らの主イエス・キリストを真に愛する者としてください。主のみ名によって祈ります。アーメン）